

年報 30号

2006年4月－2007年3月

2007年6月発行



夏のエドモントン

エドモントン地区日本人コミュニティスクール
Metro Edmonton Japanese Community School

エドモントン地区日本人コミュニティスクール

2006年度 年報 第30号

目次

| | |
|---|----|
| 御挨拶・・・在カルガリー日本国総領事 堀江 副武 | 1 |
| 2006年度役員会の活動報告・・・後援会会長 清水 聡 | 2 |
| この一年を振り返って・・・校長 常田 いち子 | 4 |
| 2006年度会計報告・・・会計 菊地 デニス | 8 |
| 2006年度コミュニティスクールの歩み・・・事務係 ダンウォルド 節子 | 10 |
| 教師・生徒名簿 | 15 |
| エドモントン地区日本人コミュニティスクールのビジョン | 18 |
| 三十周年記念祝賀会を終えて・・・高橋 尚子 | 19 |
| 「落第ママ」の独り言・・・ヒル 厚子 | 22 |
| あなたはどのくらいEdmontonian?・・・大沢 雅子 | 25 |
| 日本語勉強についての不安と希望・・・王 蔣紅 | 27 |
| 親として、先生として・・・浅野 志保 | 28 |
| 息子の日本語・・・山本 千恵子 | 29 |
| 出会い・・・猿子 花枝 | 31 |
| エドモントンでの生活・・・高橋 健 | 32 |
| Nurturing a Multicultural Identity・・・Sarah Apedaile | 34 |

編集・校正 大木 早苗・小林 麗・Robert Campbell・渡辺 京子
写真提供 高橋 健・滝田 ひろみ・渡辺 京子

御挨拶

在カルガリー日本国総領事 堀江 副武

エドモントン補習授業校関係者の皆様、学校開設30周年誠におめでとうございます。

国の基本は教育にありと申しますが、敗戦後の日本が国民の生活もままならないなか、義務教育年限を6年から9年に延長したり、越後長岡藩の米100俵の故事（下注）にもありますように、社会発展の原動力はなんと言っても人材であります。これは日本のように資源に恵まれない国はもとより、カナダのような資源大国にあっても当てはまる事実であると思います。人種のモザイクと言われるカナダに於いて、日本人・日系人の皆様がそのご子弟をカナダの学校における教育に加えエドモントン補習校において教育させているということは、親子共々多大の努力を要することであり、誠に賞賛すべきことでもあります。この点、アルバータ州を管轄する総領事として喜びに堪えません。

30年と言えば長い年月であります。この間に世界の情勢は、変わるものがないと思われていた東西冷戦構造がくずれ、代わりに米国を中心としたグローバリズムの世界が浸透しつつありますが、他方、民族的、宗教的紛争が多発しております。また、この間たとえば日本においても学校の統廃合が著しく、自分の母校が無くなってしまったという様な例は枚挙にいとまがありません。かかるなかで、うかがい知れない問題、課題を克服しつつエドモントン補習授業校を30年間も存続させてきた関係者の皆様のご努力には頭の下がる思いです。

日本に淵源を持つ皆様がエドモントン補習授業校における教育の場を一つの梃子とし、そのご子弟の日本語・日本文化との繋がりを育てつつ、カナダ社会のモザイクの一部を形成し、世代を跨ぎカナダ社会の良き市民となられることを願うものであります。

最後に、補習授業校がさらに40周年、50周年を迎える日が来ることを祈ります。

（注）越後長岡藩は明治維新の際、官軍と戦う羽目になり、結局大敗を喫した。この結果同藩の士族・百姓は大いに困窮することになった。これを見かねた長岡藩の士藩三根山藩から100俵の救援米が贈られてきた。藩ではこれをどうするか議論を重ね、結局大参事小林虎三郎の「食えないからこそ、教育をするのだ、学校を作るのだ」との主張を入れ、家臣に分配することをせず、米100俵を売却し国漢学校の校舎設立資金にあて、苦しい中にも教育に力を注いだ。（長岡市学習情報ネットワークより）

2006 年度役員会活動報告

後援会会長 清水 聡

2006 年度の役員活動報告をいたします。定例行事は運動会、学芸会、弁論大会を行ないました。また定例行事の他に 8 月には今年初めての試みのサマーキャンプ、3 月にはカジノファンドレージングとエドモントン補習校 30 周年記念パーティーを行ないました。

学校の事務関係では、省資源及び経費削減のため毎月のスクールニュースの E-MAIL による配信や、作品集の CD 化などを行ないました。

6 月の運動会はエドモントン日系人会 (EJCA) の方々と合同で行なわれ、「EJCA,MEJCS 合同ピクニック運動会」というような恒例のビッグイベントになりました。運動会当日は良い天気にも恵まれ、EJCA、MEJCS の方々が一緒になって競技やクイズ、お昼にはバーベキューをたのしみました。

11 月の学芸会は今年も無事執り行われ、指導をされた先生方、準備をすすめた学年会、及び父兄の方々、裏方のボランティアの方々、皆さんの尽力により生徒たちがのびのびと演技を披露しました。またチェンさんご夫妻の協力により学芸会の映像を DVD にしました。有難うございました。

3 月の弁論大会は先生方、及び父兄の尽力により滞りなく執り行われました。

8 月のサマーキャンプは今年初めてのプロジェクトとして行ないました。題材は「お米」で、お米を通して日本を学ぶというものでした。初めてということもあり将来的に課題もありますが教科書以外に日本語を学び、日本語に触れる場として続けていければよいと思います。

3 月のカジノファンドレージングは、補習校後援会会員全員参加の大プロジェクトで、これにより補習校年間予算の約半分を賄っております。今年は 3 月 4 日、5 日の両日にアーガイルカジノで行われました。事故や問題も無く無事カジノを終えることができました。カジノファンドレージングではコーディネーターとして菊地ご夫妻に協力いただきました。有難うございました。

3 月 24 日にはエドモントン補習校 30 周年の記念パーティーがアルバータ大学のファカルティークラブで開かれました。我が校を創始された方々や、卒業生、ご父兄方がカナダ各地、アメリカ、そして日本より参加し、またエドモントン市のマンデル市長はじめエドモントン教育委員会、カルガリー総領事館、エドモントン日系人会からゲストを迎え、現在の教師、父兄を交え、盛大にパーティーが執り行われました。30 周年パーティー開催にあたり、実行委員の大木元校長、渡辺さん、高橋さん、大沢さんの多大な尽力がありました。有難うございました。司会進行のヒルご夫妻、日舞の滝田さん、空手演技のミューラー、根本ご夫妻、写真撮影の高

橋さん、稲毛さん、受付を担当した阿部さん、川本さん、近藤さん有難うございました。

さて、このようなイベントの活動とは別に、役員会は学校運営の責任も担っております。

2006 年度は予算に関する事で役員会内で意見の一致がみられず、パネルディスカッション、大場会長辞任、常田校長辞任表明（後、辞任撤回）、役員説明会、などいくつかの難関をこえて**1** 年の活動を終了しました。

初回のカジノ以降急激に増えた収入、増えた必要経費、そしてカジノの収入にたよって低く抑えた授業料のため、これ以上生徒が増えると逆に生徒ひとりあたりの経費がかさみ、マイナスになってしまう、などという非常に難しい経済状況になっています。我々役員会はこのような状況のなかで、安易に会費、及び授業料の値上げに踏み切るのではなく、**2007** 年度の予算を経費節減、予算見直し、また我が校にとってどのようなイベントや活動が必要か見直すことよって長い目で見た学校運営の計画ができると考えています。そのためには、校内連絡や宿題などの E-MAIL 化、各行事へのボランティアとしての参加など父兄のみなさんの協力が必要です。

このようなことは現在進行形で **2007** 年度に引き継がれていきます。

2007 年度は学校移転も控えていますし、今後の学校についても話し合っていかなければならないでしょう。そのような意味では、**2006** 年度は学校が抱える問題をきちんと認識した年といえるのではないのでしょうか。

2007 年度はニュースレター、号外等のお知らせを活用しいろいろなことをみなさんにお伝えしていきます。また今後も今までと同様、いろいろな行事に協力をお願いします。

本年度は教師会の先生方をはじめ、父兄の皆様、ボランティアとして協力してくださった方々、そして、カルガリー総領事館、エドモントン日系人会、海外子女教育振興財団など多くの方々のご協力ご支援によって滞りなく運営できました。また、本年度を最後に退職された井上先生、大沢先生、山添先生、岡本先生有難うございました。この場を借りて皆様にお礼申し上げます。

2007 年 5 月 28 日

この一年を振り返って

校長 常田いち子

今年の3月末、本校の30周年を記念するパーティが盛大に開かれました。出席された方々のお話やスライドショーを通して、この学校の歴史の長さを痛感する機会となりました。「30年前生徒であった子どもたちが、今、当時の私の年令に達しているのです!」、「その時々には紆余曲折があったけれども、その都度知恵を出し合って乗り越えてきました」、「在学した生徒や卒業生が今世界中で大活躍しているのは、この学校で勉強したからです」と話された元保護者の方々、「この補習校で学んだことが自分の将来に大きな影響を与えた」と話してくれた元在校生、それぞれに含蓄に富んだお話しでした。ゼロから手作りで創り上げた学校が30年を経て、揺るぎない組織として存在し得ることは、ひとえに創立当時からの関係者の方々によるご尽力の賜だと思えます。出席された方々の満足そうで誇らしげなお顔が強く印象に残りました。その歴史を引き継ぐ一端を担う者として、責任の重さを改めて感じている次第です。

この学校が創立された1977年に、私はエドモントンに住んでおりましたが、学生でしたし、しかも子どもが生まれたばかりであったこともあって、学校のことは風の便りに聞く程度でした。その後帰国、1999年に再びこちらに戻って来た時に、教師として採用していただいて、それ以来本校にお世話になって参りました。

初めて本校の生徒達に接した時、大きなショックを受けました。なぜかと言いますと、その時の中学3年生すべてが日本語と英語の素晴らしいバイリンガルであったからです。その後、本校の生徒の多くがバイリンガルであることが分かって以来、「一体どのようにして、このようなレベルの高いバイリンガルが育てられるのか」という疑問が私の中に生じ、その視点から本校の生徒に対して強い関心を持つようになりました。保護者の方々の日本語教育に対する姿勢も興味の対象でした。その後2001年に、大木先生のもとで担当したリサーチプロジェクトや、専門家・保護者の方々のお話を通して、バイリンガル教育についての方法論を私なりに学ぶことができました。毎週金曜日の夜に学校へ来る子どもの姿はたいへん健気に映りましたし、教師として、できるだけその可能性を伸ばしてあげたいという思いも持ちました。また、何よりも、この学校に来ている子どもたちがどんどん日本語力を付けていく様子を眺めることは、大きな楽しみでした。この8年間、本校とはこのような関わりを持って過ごして参りました。

昨年4月から、私は大木先生から校長職を引き継ぐことになりましたが、自らの力不足を承知の上でしたから、その職務を教務に限定していただきました。その上で、役員会と協力し、

できるだけ生徒が学びやすく、教師が教えやすい環境を作ることを心がけてきました。大木先生はじめ、教師会や役員会の方々にいろいろと助けていただいて、この1年間を終えることができたと思っております。

さて、本校には「子供達へ」で始まるはっきりとした「ビジョン」があります。これには当初から私自身も大きな共感を覚え、微力ながら、その実現に少しでも役立つことができればと願ってきました。「本校の教育方針やしぐみ」は、このビジョンのもとに築かれていますが、30年間の関係者による試行錯誤の結果に基づいて創られたものです。これまで何度となく「この学校の教育方針やしぐみを変えた方がよい」という意見が出されては、結局元に戻っている経緯を見るにつけ、これは本当によく考慮されたものだと思います。ですから、私の在任中は、この方針に従って、補習校としての教務を進めていくつもりでおります。

授業と家庭学習

本校の一番の目的は、何と言っても「生徒の日本語力向上」です。そのために、保護者の皆様には、この補習校での学習の仕方をもう一度確認していただきたいと思っております。この学校の小、中学のクラスでは、国語の教科書を使って日本語を勉強しています。週一回3時間の授業しかしていませんので、生徒の学習には当然、家庭での協力が必要です。生徒を一隻の船に例えるなら、教師はナビゲーターであり、保護者は船長であると思っております。つまり、教師は授業で生徒の進むべき方向を示しますが、実際に生徒を目的地まで到達させるのは保護者であるということです。このため、教師は月案を各家庭に渡し、その月の学習予定をお知らせしています。それに従って、毎週その週に学んだことを宿題に出し、家庭で復習をしてもらうようにしています。この宿題は翌週必ず提出することが義務づけられています。併せて、家庭では日本語で話すこと、本の読み聞かせ等、いろいろな方法を使って日本語に接する環境を作ってあげることも必要です。これらのことは特に、幼稚科も含む低学年の間に習慣づけてもらいたいことです。英語環境のもとで日本語を学ぶのは、決して容易なことではありませんが、上に述べた方法によって着実に日本語力を伸ばせることが経験的に分かっていますから、今後とも教師と保護者は生徒の日本語力向上のため、協力して努力いたしましょう。

宿題のe-mail配信

これまで宿題は、教師が用意したものをプリントして生徒に配っていましたが、コピー代削減のために、「将来的に宿題を各家庭に e-mail 配信し、家庭で印刷してもらおう」と役員会で決められました。さっそく2007年度から一部の学年で実施してみることにになりました。コ

ンピューター関連の不具合が予想されますが、しばらくの間は過渡期ととらえて、対処していただきたいと思います。宿題の e-mail 配信にご家庭のご理解とご協力をお願いいたします。

一時帰国の効果

ここ数年の傾向ですが、夏休みを利用して日本へ帰国する生徒がかなり増えています。そして、短期間でも日本の学校で体験入学をする場合が多いようです。24時間日本語環境に浸ることの強みでしょうか、このような経験は生徒の日本語力向上にたいへん大きな効果を与えています。夏休み明けには、それまでとはうって変わって、日本語を積極的に話すようになっていたり、日本に強い関心を持つようになっていたりしています。このような生徒がクラスに戻って来ると、他の生徒にとっても良い刺激を与え、クラスに活気をもたらすようです。一時帰国は、日本語を勉強する強い動機付けにもなりますから、できることなら、そのような機会を多く作ってあげて欲しいと思います。

教師と研修

今年度、本校には11名の教師がいましたが、どの教師もたいへん熱心で、誠意を持ってその任に当たってくれました。しかしながら、すべての教師が小学、中学課程の教職免許を持ち、しかも経験豊かというわけではありません。ですから、魅力ある授業を提供するために、教師は自己研修はもちろん、いろいろな形で研修を続けていく必要があります。毎月の教師会、個人的な集まり、メールなどで、教師は教案や指導方法に関する意見や情報の交換を頻繁に行っております。また、毎年夏、日本政府の支援のもとに開かれる「北米西部地区現地採用講師研修会」で研修する機会もあります。これには毎年教師2名が参加し、得られた情報は9月の教師会で報告され、他の教師にも共有されています。今年度は、「全国海外子女教育国際理解教育研究協議会」から巡回指導の講師が当地に来られ、補習校の指導案について詳しく学ぶ機会もありました。今後も、いろいろな機会を利用しながら、教師の資質を向上させる努力を続けていくつもりです。2007年度には5名の新任教師を迎えます。ベテランの教師の育成には時間がかかることをご理解いただき、長い目で見ていただくようお願いします。クラス運営についての率直なご意見はいつでもお知らせください。

大人の生徒の扱い

ここ2、3年、本校で子供と一緒に学習することを希望する大人の生徒が増えています。そのほとんどが、大学で日本語をかなりのレベルまで習得したり、あるいは、日本に長期滞在し

た経験のある生徒です。大人の生徒には、「本校が子どもを対象にした授業をするところであること」を納得してもらい、「頻繁に休まれると教師も困るし、他の子どもへも悪い影響があつて困ること」を伝え、「宿題は毎週きちんと提出すること」、「メンバーとしての責任を果たすこと」などを条件にして、入学を許可しています。ほとんどの生徒が真面目で問題はないのですが、中には、欠席が続いて教師が困る場合もありました。反対に、大人の生徒の熱心な学習態度がクラスにとってプラスになる場合もありました。コミュニティに開かれた学校として、できるだけ大人にも門戸を開く姿勢を維持していきたいと考えています。

校舎移転に向けて

ご存知のように、本校はこれまで校舎借用でずいぶん苦勞をしてきました。今借りているリチャード・シーコード校も、2007年6月で移転して欲しいという通知をだいぶ前に受けていました。このため、昨年春から役員会の方々と共に、可能性のある学校や施設を探してきました。本校の場合、毎週使う教室数だけでなく、図書の本を常時置いておく場所も必要ですから、この点が借りる場合の大きな問題となっています。教育上、図書は重要ですから、無くすことはできません。図書のスペースが充分にとれない場合には、図書のサイズを小さくしたり、本を時々入れ替えるなど、柔軟に対応をしていかなければならないでしょう。他の学校の教室を使うことは、教室活動に多くの制約が伴いますし、とても気を使います。誰にも気兼ねすることなく、生徒たちの作品を展示するなど、思う存分教室を使ってみたいという願いは、教師だけでなく生徒も持っています。できることなら、もう引っ越す必要がないように、自分たちの校舎を所有したいと願う人も多いのではないのでしょうか。その可能性を探って、現在、役員の方々が調べていますが、結論が出るまでまだまだ時間がかかるようです。いずれにしても、それまではどこかの学校を借用することになりますから、その学校とは常に良い関係を保っていく必要があります。そのために私達は細心の注意を払っていかねばなりません。どこに決まるにしても、多くの人にとって納得のいく、通いやすい学校が見つかって欲しいと思います。

今後、様々な問題が予想されますが、「子供達により良い日本語学習の機会を与える」という目的に向かって、これまで同様にお互いに知恵を出し合い、協力しながら、頑張っていきたいと思います。

2006年度 会計報告

会計 菊地 デニス

2006年度会計報告、2007年度予算案

Prepared by Enko St Laurent; Audited by Riyoko Shimizu and Kazumi Lopez

2007年4月21日

| | | 2006年度 決算未確定 | | 2007年度予算案 |
|------------|---------------------------|-----------------|----|--------------|
| 繰越金 | | | | |
| 当座預金－授業料口座 | Checking-Operation | 9,411.60 | | |
| 当座預金－カジノ口座 | Checking-Casino | 4,786.30 | | |
| 小口現金 | Petty Cash | 476.68 | | |
| 定期預金－授業料 | GIC-Operation | 60,660.80 | | |
| 定期預金－カジノ | GIC-Casino | 20,000.00 | | |
| 定期預金－長期性 | GIC-Emergency Fund | 52,568.17 | | |
| 繰越金合計 | Total Beginning Cash | 147,903.55 | | 119,090.00 |
| 収入 | | | | |
| 授業料 | Tuition Income | 25,194.00 | | 26,600.00 |
| 会費 | Membership Income | 1,500.00 | | 1,550.00 |
| 日本政府補助金 | Grant -Japanese Gov't | 25,711.85 | *1 | 20,064.00 |
| エドモントン市補助金 | Grant-City of Edmonton | - | | - |
| ヘリテージ収入 | Fund raising-Heritage | 370.00 | *2 | |
| カジノ | Fund raising-Casino | 72,329.25 | *3 | 36,000.00 |
| サマーキャンプ | Summer Camp | 457.28 | | |
| G S T 還付 | GST Refund | 448.17 | | |
| 預金利息 | Interest | 3,977.67 | | 2,000.00 |
| 収入合計 | Total Cash Receipts | 129,988.22 | | 86,214.00 |
| 繰越金、収入合計 | | 277,891.77 | | 205,304.00 |
| 支出 | | | | |
| 教師謝礼 | Salaries Teachers | 48,146.60 | | 44,488.00 *9 |
| 校長謝礼 | Salaries Principal | - | | 4,090.00 *9 |
| C P P、E I | | 1,916.83 | | 2,200.00 |
| 教師コピー手当 | Copy fee to Teachers | 3,600.00 | | - |
| 事務職員謝礼 | Salaries Admin | 6,490.00 | | 5,240.00 *10 |
| | | 60,153.43 | | 56,018.00 |
| 教材費 | Teaching Material | 3,597.06 | | 2,000.00 |
| カジノ費用 | Casino Expense | 72,210.45 | | |
| コピー代 | Copying | 2,280.97 | | 8,000.00 |
| 文化事業費 | Cultural Event | 750.56 | | 1,000.00 *11 |
| 保険料 | Insurance | 1,250.00 | | 1,250.00 |
| 校舎賃借料 | Rent | 11,593.80 | | 12,720.00 |

| | | | | |
|-----------|----------------------|---------------------|----|---------------------|
| 銀行手数料 | Bank Charges | 380.36 | | |
| 図書費 | Library Expenses | 1,847.97 | | |
| 褒賞 | Rewards for Student | 354.23 | | |
| 会議費 | Meeting | 991.45 | *5 | |
| 事務用品費 | Office Expenses | 1,144.29 | *6 | 1,000.00 |
| 北米研修ホスト費 | Expense-host NA conf | - | | 2,000.00 |
| 北米研修参加費 | Prof Dev-NA conf | 92.00 | | 1,100.00 |
| 接待費 | Hospitality | 246.05 | *7 | |
| サマーキャンプ費用 | Summer Camp | 864.58 | | |
| 支払G S T | GST Paid | 1,044.57 | *8 | |
| 予備費 | Miscellaneous | | | 1,100.00 *12 |
| 支出合計 | | 158,801.77 | | 86,188.00 |
| 残高 | | <u>\$119,090.00</u> | | <u>\$119,116.00</u> |

*1 教室賃借補助\$5,327.85、教師謝礼補助\$20,400

*2 2005年夏の分

*3 本校の純手取りは未収

*4 招待状郵便代など未精算のものあり

*5 大木先生等\$460、役員引継ぎ食事会\$350、石田、宇田川、島田 Transition meeting Ohki/Board

*6 携帯電話\$265、切手\$321、事務用品\$558

*7 全海研3名昼食、夕食、常田、大場前会長

*8 還付請求50%

*9 Including Kyoshikai and Gakugeikai wage

*10 Tosho\$1440、Jimu\$1800、Kaikai\$2000

*11 Undokai\$500、Gakugeikai\$300、Benrontaikai\$200

*12 銀行手数料、図書事務用品、作品集、花代など Bank fees, library expense, Sakuhinsyu, Flowers etc.

2006年度コミュニティスクールの歩み

事務係 ダンウォルド 節子

<入学式・始業式> 4月7日(金)

- ・ 総数71名の生徒が登録した(幼稚科年中組10名、年長組5名、小学1年生16名)が入園・入学した。
- ・ 幼稚科年中組・小学1年・3年が2学級編成、年長組、小学2年、小学4、5、6年中学2年が1学級の12学級が編成された。
- ・ 今年度も引き続き、プレイスクールが父母有志の手で運営された。

<2006年度年次総会> 4月7日(金)

| | | |
|-----|------------|-----------------|
| 会長 | 大場 真人 | (2007年1月辞任) |
| 副会長 | 清水 聡 | (2007年1月より臨時会長) |
| 会計 | 大沢 誠 | |
| 書記 | 小林 麗 | |
| 評議員 | 元田 幸子 | |
| | 阿部 見香子 | |
| | ジョスリン ウドン | |
| | メーガン ジョーンズ | (11月辞任) |
| 会計係 | 松本 苑子 | |
| 図書係 | 清水 理予子 | |
| 事務長 | マクレーン 由美子 | (6月辞任) |
| 事務係 | ダンウォルド 節子 | (9月より) |

<学年懇談会> 4月28日(金) - 5月5日(金)

- ・ 1年間の各クラスの方針を伝え、父母との話し合いをもった。

<「バイリンガル教育の達人」勉強会> 5月26日(金)

- ・ 宇田川洋子先生を講師に招いて、バイリンガル教育についての講演を聴講した。その後、父母達と質疑応答し、意義ある会となった。

<名札着用> 5月26日(金)

- ・ 生徒の安全確保という目的で学校関係者の名札着用が義務づけられ、この日より実施した。

<ピクニック運動会> 6月10日(土)

- ・ さわやかな天候のもと、例年通りエドモントン日系文化会館でエドモントン日系人会(EJCA)と合同の運動会が盛大の行われた。

<1学期終業> 6月23日(金)

<焼き鳥作り> 7月29日(土)

- ・ ヘリテージフェスティバルの準備の一環として後援会、日系人会会員を中心に焼き鳥をつくった。

<北米西部地区現地採用講師研修会> 7月29日(土) - 31日(月)

- ・ アリゾナ補習校で開催され、本校からは2名(山添、田端先生)が参加した。

<ヘリテージフェスティバル> 8月5日(土) - 7日(月)

- ・ 今年度は、コミュニティスクールは各自、自主的に参加した。

<サマーキャンプ> 8月14日(月) ~ 17日(木)

- ・ 新しい試みとして小学3年以上を対象に、エドモントン日系文化会館で4日間(午前9時~午後2時)サマーキャンプを開催した。テーマを「米」とし、米について様々な体験学習を行った。

<補習校のための指導案に関する巡回訪問> 8月19日(土)

- ・ エドモントン日系文化会館で、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会から3名の派遣指導員を迎え、本校6名の教師が参加して研修を受けた。

<図書館の移転> 8月22日(火)

- ・ リチャード・シーコード校の依頼で図書室を現在使用している部屋へ移転した。役員会を中心にボランティアの教師、父母たちによって、速やかに行われた。

<2学期始業> 9月8日(金)

- ・ 生徒数71名

<習字教室> 9月14日(木)

- ・ 岡本浩子先生指導のもとに、小学1年から中学2年の生徒が第74回全国書画展覧会の課題に取り組み、出品した。後日、展覧会実行委員会より金賞1点、銀賞22点、銅賞26点を受賞した。
- ・ 作品は3月発行の作品集に載せた。

<学年会> 9月22日(金)・29日(金)

- ・ 役員会、教師会、保護者の意思疎通をはかる場として、各学年ごとに父母、会長、校長が懇談した。
- ・ 学年ごとに、代表が選出された。

<堀江総領事夫妻の学校訪問> 9月29日(金)

- ・ 堀江総領事夫妻の学校訪問を受けた。本校の現状を理解していただくよい機会となった。

<みんなの作品集 夏号> 10月27日(金)

- ・ クラス文集として、各クラスで作成し発行した。

<学芸会> 11月28日(土)

- ・ 幼稚科年中組から中学2年までの全クラスが参加し、プレイスクールの子供たちも発表した。
- ・ 学年代表を中心に、準備・運営された。
- ・ 終演後の茶話会で、創立30周年実行委員会よりケーキが贈られ、生徒全員がいただいた。
- ・ 在カルガリー総領事館より2名の来賓を迎えた。

プログラム

- | | |
|--------------------------------|--------------|
| 1. はじめの言葉 | 大沢真琳 |
| 2. あいさつ | 後援会会長 |
| 3. 劇「ミミズとポットくん」 | 幼稚科年長組 |
| 4. ミュージカル「スイミープラス」 | 幼稚科年中組・小学2年生 |
| 5. 劇「うみのなかは大さわぎ」 | 小学1年1・2組 |
| 6. 劇「なぞなぞのすきな女の子」 | 小学3年生1組 |
| 7. 劇「きつつきの商売」 | 小学3年生2組 |
| ————— 合唱 「ずいずいずっころばし」「花」 ————— | 保護者会 |
| 8. 語り聞かせ「浦島太郎・・・その後」 | 小学4年生 |
| 9. 劇「嵐の夜に出会ったら」 | 小学5年生 |
| 10. うたとおどり「サンサンたいそう」「どんぐりころころ」 | プレイスクール |
| 11. 劇「お化け学校」 | 小学6年生 |
| 12. 踊り「そうらん節」 | 中学2年生 |
| 13. 堀江総領事からのメッセージ | 総領事館 |
| 14. おわりの言葉 | 山添恵太 |

<個人懇談会> 12月15日(金)、22日(金)

- ・ 各学級で日頃のような、及び進級に関する話し合いをした。

<2学期終業> 12月22日(金)

<3学期始業> 1月12日(金)

- ・ 生徒数 72名

<臨時総会> 1月12日(金)

- ・ 突然浮上した来年度の授業料値上げ案に対処するために臨時総会が開かれた。会計からの現状説明を受けた後、反対派、賛成派を交えて意見交換を行った。

<公聴会> 2月9日(金)

- ・ 役員会から臨時総会後に噴出した役員会混乱の経過説明があった。それを受け、父母が糾明し、質疑応答で善処していった。

<カジノ> 3月4日(日)・5日(月)

- ・ 本校のファンドレイジングの一環として、第三回目のカジノに参加した。

<一日入園、一日入学>

- ・ 年中組10名、年長組10名、1年生5名の入園、入学希望者を対象に行った。

<弁論大会> 3月17日(土)

- ・ 小学5年、6年、中学2年の15名の生徒が参加し、エドモントン日系文化会館で開催された。

最優秀者：ザバルスカ マリア(中2)「なくすところまるものベスト5」

優秀賞：ザバルスカ スザナ(小6)「私の三大失敗」

<みんなの作品集> 3月23日(金)

- ・ 全校文集として編集され、各家庭に配布した。今年度は教師が原稿作成まで担当し、編集は保護者が行った。文集は印刷せず、コンピューターでCD化し配布した。

<終業式> 3月23日(金)

- ・ 常田校長から72名の生徒に在学証書が授与された。
- ・ 14名の生徒に皆勤賞が贈られた。
- ・ 創立30周年のお祝いで、グリコカナダから生徒へのお菓子が寄贈された。

<30周年記念祝賀会> 3月24日(土)

- ・ アルバータ大学のファカルティクラブで、学校30周年記念祝賀会が開かれた。80名の来客で30周年にふさわしい祝賀会になった。

< 2006年度教師・生徒名簿 >

| 学級／教師 | | 学校で使う名前 | 漢字 |
|-----------------------|---|--------------|----------|
| 年中一うさぎ組 (前半) 豊岡友紀子 | 1 | きゃんべる らいあん | |
| | 2 | ひゅーすとん ぶらっどり | |
| | 3 | えいぷでいる えま | |
| | 4 | みじやり すかい | |
| | 5 | ざさだ あんな | |
| | 6 | すとぐりん だんてい | |
| 年中一りす組 (後半) 豊岡友紀子 | 1 | きん りか | 金 里加 |
| | 2 | ふらんきういず にこーる | 舞子 |
| | 3 | もりた えこ | 守田 響子 |
| | 4 | わたなべ はな | 渡辺 |
| 年長組 井上眞智子 | 1 | こばやし まや | 小林 真矢 |
| | 2 | こんどう ゆりあ | 近藤ゆり愛 |
| | 3 | あべ みあ | 阿部 |
| | 4 | おう ポブラ | 王 (母 蔣紅) |
| | 5 | スワロー アレック | |
| | 6 | ラヴォア しょうや | 祥也 |
| 小学校1年1組 山田眞理 | 1 | かわもと さくら | 川本 |
| | 2 | きん かな | 金 加奈 |
| | 3 | ふらんきういず じえしか | |
| | 4 | さかぐち かい | 坂口 海 |
| | 5 | もとだ れい | 元田 怜 |
| | 6 | もりた るか | 守田 流佳 |
| | 7 | ロペス みづき | |
| | 8 | ほし まりあ | 星 |
| 小学校1年2組 坂口 宗 | 1 | いとう たいし | 伊藤 大志 |
| | 2 | かいで えりか | 開出 恵立佳 |
| | 3 | マクレーン はな | 葉奈 |
| | 4 | ヴァン りゅうせい | 隆誠 |
| | 5 | やまだ れな | 山田 玲奈 |
| | 6 | やまもと にこらす | 山本 |
| | 7 | ますだ りんたろう | 増田 麟太郎 |
| | 8 | うえばやし れお | 植林 怜生 |
| | 9 | いなげ みずき | 稲毛 美月 |

| 学級／教師 | | 学校で使う名前 | 漢字 |
|-----------------|---|---------------|--------|
| 小学校2年 田端裕美 | 1 | しみず ゆうき | 清水 勇樹 |
| | 2 | こばやし うな | 小林 宇奈 |
| | 3 | ヴァン ゆうひ | 勇飛 |
| | 4 | チャオ アンジェラ | |
| | 5 | リー ドロシー | |
| | 6 | ポプラサート パッターリー | |
| | 7 | ささき ゆり | 佐々木 ゆり |
| 学校3年1組 大沢雅子 | 1 | いとう まりな | 伊藤 真理奈 |
| | 2 | きくち あゆみ | 菊地 歩 |
| | 3 | たかはし ゆい | 高橋 結 |
| | 4 | やまだ かりん | 山田 花鈴 |
| | 5 | ウォン ケビン | 井戸賀 駿 |
| | 6 | わたなべ けんた | 渡辺 健太 |
| 小学校3年2組 島田圭規 | 1 | ジャクソン ジャスミン | |
| | 2 | たきた たまお | 滝田 圭央 |
| | 3 | フェドロウ ゆうこ | 優子 |
| | 4 | 松本 スコット | 松本 寿弥 |
| | 5 | りい かな | 李 賀菜 |
| 小学校4年 山添厚子 | 1 | 大沢 真琳 | |
| | 2 | 清水 紗羅 | |
| | 3 | ジャクソン マーカス | |
| | 4 | 陳 シェリー | 陳 芝萱 |
| | 5 | ソン ウンジ | 宋 |
| | 6 | マギル マイケル | |
| 小学校5年 長倉由紀子 | 1 | 伊藤 勇希 | |
| | 2 | 金 力蔵 | |
| | 3 | 大場 蒔 | |
| | 4 | モハビール アマー | |
| 小学校6年 岡本あや | 1 | 王 芸蓉 | (母 蔣紅) |
| | 2 | 菊地 光 | |
| | 3 | 開出 安和 | |
| | 4 | ザン ジェニー | 張 微 |
| | 5 | マクレーン 海 | |
| | 6 | ザヴァルスカ ズザナ | |
| | 7 | ち しゅえてん | 雪 |
| | 8 | メアリー ン | |

| 学級 教師 教室 | | 学校で使う名前 | 漢字 |
|---------------|----|------------|---------|
| 中学校2年 大場恵子 | 1 | ジェラード エマ | |
| | 2 | 劉 一鳴 | (母 王美琪) |
| | 3 | ダンウォルド 滯 | |
| | 4 | ザヴァルスカ マリア | |
| | 5 | ラムジー アイリーン | |
| | 6 | 植林 アミ | 万実 |
| | 7 | 植林 千佳 | |
| | 8 | 山添 恵太 | |
| | 9 | チェン ジェミイ | 陳 |
| | 10 | ザン ジム | |



冬の帰宅風景



エドモントン地区日本人コミュニティ・スクールのビジョン

子供達へ

あなた達は、かぎりない可能性と才能を持っている。この才能を引き出し、発展させていく一つの機会が、ここに与えられた。

子供達よ！この学校で一生懸命日本語を学べ。又、英語圏に住んでいる利点を活用して、英語と日本語の完全なる使い手に育ってくれ。

そして将来、カナダと日本両文化の理解と人々の融和の上に、さらには、国際平和・人類の為に役立つ人になってもらいたい。

これが、この学校を作った親達のせつない祈りである。

一九七八年 エドモントン地区日本人コミュニティ・スクール運営委員会

三十周年記念祝賀会を終えて

高橋 尚子

エドモントン地区日本人コミュニティスクール創立30周年記念祝賀会が、2007年3月24日土曜日、アルバータ大学ファカルティクラブで開かれました。

祝賀会は3月でしたが、実行委員会は去年の夏休み前に結成され、卒業生の名簿作りというところから仕事ははじまりました。住所の変わってしまった人も多く、人づてに住所を調べるためにも、出来るだけ多くの同窓生や保護者に第一回目の祝賀会案内を10月に郵送しました。新年に入ると、最終確認のご案内を郵送し、その後ボランティアの方々を交えて毎週のようにミーティングが開かれ、最終的にプログラムや座席表などが決定されました。当日も皆、早めに会場入りし、校旗、校章、字幕の飾り付けなどが行われました。

いざ本番、80名の参加者がありました。暖かな日で、会の始まるころはまだ、夕日がきれいに広がっておりました。次々と人が集まってきましたが、補習校ではカジュアルな姿に見慣れているかたがたも今日はドレスアップしており、目を見張るばかりです。はるばる日本からは、森 彰一郎ご夫妻が参加してくださいました。(1978-80、後援会員) 森ご夫妻は、日本エドモントン会からの寄付のお土産つきでした。米国オースティンからは笹田佳幸氏(1982-84、生徒)、バンクーバーからは中村政男氏(1982-1995、後援会員)、BC州ベールマウントからはデイビット・ヤング夫妻(1977-1979、教師)、カルガリーからは塩沢千秋夫妻(1977-1986、後援会員)など、遠方からの出席者も多く見受けられました。久しぶりに会った人々があちらこちらで談笑の輪を作っていましたが、カクテルアワーも終わり、スティーブ・ヒル氏の巧みな司会で祝賀会は始まりました。はじめにカルガリーから出席していただいた日本総領事館、首席領事西村洋一氏の祝辞と乾杯の音頭で食事は始まりました。メニューは試食までして最終決定したシーザーサラダにサーモングリル、乾杯はシャンペン。大変おいしくいただきました。後援会会長、清水聡氏の挨拶の後、遠方からの出席者にテーブルスピーチをいただきました。皆さん10年前、20年前のことをつい先日のように語られ、このエドモントン補習校の歴史や、学校の運営に携わってきたかたがたの熱い思いを垣間見ることができました。

食事の後のプログラムは、有志による日本語カナダ国歌の合唱で始まりました。一同、合唱の間は起立して拝聴。この日本語カナダ国歌はこの日のために大木崇氏が和訳したもので、事前に集まって歌の練習も行われました。

その後、常田いち子校長から現在の学校の説明があり、エドモントン教育委員会代表のベブ・エスリンガー女史からは祝辞をいただきました。その中では、エドモントン市における継承言

語教育の大切さをいわれておりました。エドモントンにはわれわれの学校のような組織が50以上もあり、自らの文化、言語、伝統の維持、継承に努力をはらっているとのことでした。エドモントン日系人会会長のマイク・村上氏からは、ご母堂のアイコ・村上さんとともに、祝辞をいただきました。アイコさんは戦前、戦時中にまたがるBC州での日本語学校の思い出を語ってくださいました。エドモントンだけにとどまらない、母国語をめぐる思いや努力を知ることができました。このような語り継ぐ機会が、10年単位の祝賀会だけではなく、もっとあってもよいのではと思われました。

ここで、滝田ひろみさんの日本舞踊、千代の寿が披露されました。静かさの中にも凛とした強さを秘めた日本舞踊を踊る滝田さんは、まさしく普段とは別人で、それ以来少し見る目がかわっております。その後、根元ご夫妻による空手の型、組み手が披露されましたが、これまた先ほどまで、向かいでおしとやかに食事をしていた方と同一人物か、と驚くほどのりりしきでした。剛毅でありながら、礼節をわきまえた空手、優雅で抑えた動きの中で表現する日本舞踊、ともに日本文化のあり方を良く表していたと思います。

さて、この途中エドモントン市長のステファン・マンデル氏が駆けつけてくださいました。祝辞の中で、多文化主義はエドモンタンの発展に大事な要素であり、そしてこのようなコミュニティスクールが多文化主義の根底を支えていることを強調されておりました。その後、大木早苗前校長の説明の元で、これまでの学校の長い歴史を物語るスライドショーが上映されました。30年分の運動会、学芸会、入学式などの写真からピックアップされた150枚ほどの写真の中には、出席者の10年前、20年前、30年前の写真も含まれており、そのたびに会場からは、声が上がっておりました。スライドショーを皆で楽しんだ後、今度は参加者の集合写真の時間となり、その後は歓談の時間となりました。

あちらこちらで、懐かしい思い出話や近況報告に花が咲いていましたが、時間とともに、名残惜しそうに帰途につく人も増え、11時半ごろにお開きとなりました。その後、学校のロゴや校旗などの飾り付けをはずしながら、滞りなく祝賀会を終えることができた安堵感をかみしめることができました。

この会には十数年前に成人クラスに在籍し、その後日本への留学もはたしたケネトンさんが出席しておりましたが、日本の留学から戻ったところ成人クラスがなくなっており大変残念であったとおっしゃっていました。語学力によっては子供に混じっての授業ですが受け入れてもらえますよ、とお話したところ早速、先日授業の見学にこられていました。旧交を温め、歴史を語り継いだけではなく、新たな機会を生み出す場でもあったのだとうれしくなりました。

実のところ、飲みに行くのが好きなら、打ち上げの場所を決める係りをやらないか？とい

うお誘いがこの実行委員会に参加することになったきっかけでした。新参者でおまけに、年内の帰国が決まっている短期滞在者はこのような会の委員には役不足であろうから、たくさんいる委員のうちで使い走りの仕事であればと、軽い気持ちでお引き受けしたのですが、メンバーはその後も4人のままでした。私の不安をよそに、どんどん仕事は進んでいきます。名簿作りぐらいまでは単純労働でよかったのですが、会本番が近づくにつれ、大木先生、大沢さん、渡辺さんにお任せっぱなしのことが増えてしまいました。それでも、この企画に参加させていただいたおかげで、多くの方々とお知り合いになることもできましたし、多少は深く学校のことを知ることができたと思っております。小規模の学校ならではの、皆で作り上げていくという姿勢が、このような会の企画を通じても味わうことができました。エドモントンでの思い出が数倍に膨れ上がった経験でした。出席者の方々、委員会、ボランティアの方々、皆がこの学校を大切に思っているのだな、ということが伝わってくる良い祝賀会だったと思っておりますが、それに携わる機会をいただきまして感謝しております。ありがとうございます。十年後の40周年記念、われわれは来ることができるでしょうか？でも次は自分も駆けつけたいな、と思わせるに十分な祝賀会でした。



←30周年祝賀会記念撮影

エドモントン市長
ステファン・マンデル氏→



「落第ママ」の独り言

ヒル 厚子

年報に新参者として原稿を書くようにと依頼されたのは2年前のことだった。その時私はエドモントンに引っ越してきた過程と息子の日本語習得について書かせていただいた。今回は日本語学校を辞めていくものとして一筆という依頼をいただき、この筆を執っている。

まず、息子=恵太については、2年半の短い間ではあったが、よくがんばって日本語学校に通ったことを、たくさん褒めてやりたいと思う。私の基準は低すぎると多くのご父兄には笑われることは十分承知の上である。しかし私の怠慢から全く日本語を知らずに育ち、10歳の時、突然日本に11ヶ月留学して、荒療治で日本語を覚えてきた息子である。エドモントンに引っ越してきた時に「日本語を忘れないように、小さい子供たちと一緒にいいから日本語学校に行く。」と自分で希望し、何度もくじけそうになりながらも2年半も(?)がんばったのだから、私としては「よくがんばった」と認めてやりたいのである。

とはいえ現在の日本語能力は如何?・・・ひらがなとカタカナは読み書きできる。漢字は小学2年生程度。語彙は4年前に日本留学から帰ってきた当時の半分くらい・・・?

日本語学校に2年半通って、息子の日本語が上達したかと尋ねられると、決して首を縦には振れない。それは日本語学校が悪かったのではない。100%私と息子の責任である。まず、息子の日本語学校に通いたいという動機が他の子供たちとは違っていた。つまり「苦勞して覚えてきた日本語を忘れたくない。」というだけのもので、新しい漢字を覚えたり、宿題を完璧にやり遂げていくという目標は最初からなかった。いわば“日本語環境の中に身をおく機会”として学校に通っていたにすぎない。補習校としてのエドモントン校が、そんないいかげんな動機の生徒を受け入れてくださったことには、親子共々感謝している。私自身も「宿題くらいはきちんとすませなさいよ。」と口を出すものの、子供と戦ってまでがんばらせることは皆無だった。一生懸命に教えてくださった先生方には本当に申し訳けない。ただ、せっかく自分でやろうとしている本人のやる気をなくさせないためにも、日本語が苦痛にならないためにも私は放任主義を選んだのである。それが正しい選択であったかどうか?少なくとも、私たち親子にとっては、正しい選択であったと思う。

一方で私と息子の2年半をふり返ると、子供に外国で日本語を学ばせる上で欠けていた多くの部分が浮き彫りにされてくる。

第一に、『子供たちの日本語習得の鍵は、あくまでも親にある。』という原則である。金曜日の夜のわずか3時間というのは、他の習い事と同様、ほんの「手ほどき」にすぎない。犬の訓練を例に取るのは失礼かもしれないが、犬の訓練校に通ったとき、初日に釘をさされたことは、「これは犬の訓練ではなく、飼い主の訓練です。ここで学ぶことは、毎日少なくとも15分は家で練習してください。家で練習せずにここに来て、犬は何も学びませんから意味はありませんよ。」ということだった。当たり前の話だが、きちんと毎日練習したことは、我が家の犬もしっかり身につけたし、しなかったものは、いくら訓練場ではうまくできていても、実際には身につかなかった。日本語習得も、どれだけ頻繁に親がかかわり、一緒に勉強するかにかかっているのだと痛感した。つまり、息子の落第は、「落第ママ」の私に大きな責任があることを認めなければならない。

次に『基礎の大切さ』である。息子は何度も書いたように「つけ刃^{やいば}の日本語」である。日本に行った時に、小学五年生の仲間たちが話す日本語を耳から覚え、ひらかなとカタカナとわずかな漢字をその語彙に合わせて覚えていただけである。12歳でエドモントン補習校の小学一年生に中途入学したとき、教科書に出てくる語彙でさえ、わからない言葉だらけだった。年齢が大きいせいもあって、それなりに会話はできるのに、ぽっかりと幼児言語が抜けていたのである。小さい時から積み重ねられてきた土台がない上に国語力を築かせていくことの限界に直面させられた。さらに学年が進むにつれ、その土台のもろさは、より顕著になっていったように思う。ここで、私が鬼になってびしびしと叩き込む教育を家でしていれば、結果はまた違ってきたのかもしれないが、前述の通り、私にはそこまでやらせる意味が見出せなかった。

それでも一年生と二年生は何とか切り抜けた。年齢的に教科書の内容がおもしろくないという不満はあったが、知らない言葉だらけだったので、息子も少しは刺激を受けて学んでいた。しかし、3年生になると、今度は「漢字の海におぼれて」しまった。似たような漢字は全部同じに見えたし、語彙も少ないので字と言葉も結びつかなくなった。息子は英語のスペルが1文字ちがっていても、だいたい意味はわかるように、漢字もだいたい似たような字であれば、それで良いと思っている。「時」や「詩」のように偏が変わるだけで意味の変わる字になると、すっかり混同してしまって、すでに覚えていた漢字さえわからなくなってしまった。漢字で脱落すると、いよいよ奈落の底へと落ちていった。

三年生の一学期で脱落した息子は、中学部の大場先生から、「年齢的にも同年代の子供たちと一緒にの方が、やる気が出るかもしれない。耳で聞く分には、だいたい分かっているようだから、

中学生の授業に出てみてはどうですか。」と誘っていただいた。ほとんど退学を決めていた段階だったので、まあだめでもともとと、去年の9月から中学生の仲間に入れていただいた。授業は耳からは60%くらい分かったらしいが、読み書きでは1%もわからなかった。内容はもちろん年齢相応なのでおもしろかったが、読み書きができないので、もどかしくてたまらない様子だった。仲間たちの話す日本語は、早すぎて理解するのに苦労したし、自分が伝えたいことは英語でしか説明できないので会話もなかなか成り立たず、“友達がいるから行く”というような動機にも転換されなかった。息子は日本語学校の中に自分の居場所がないことを、はっきりと自覚し退学の決断を下した。

こうして3月で我々親子は日本語学校を去った。息子は「宿題もなく、学校に行っている間だけ、少し教科書を読んだりビデオを見たり、友達と話したりして日本語を話せる機会を持つ。」そんな場所があれば行ってみたいが、補習校としての日本語学校は自分には無理だと認識している。私自身も15歳にもなった息子を、無理やり鞭打ってまでがんばらせる意味を見出せない。将来、自分で学びたくなった時、必要となった時にやれば良いと思っている。人生短し。今は息子が興味を持ち、追い求めているものを存分に楽しませてやりたいと思う。

最後に「落第ママ」もこの一年間教師として小学四年生を教えさせていただいた。「落第ママ」でも、他のお子様を教える立場になると豹変できる。一週間に一度のわずかな時間に、できるだけ楽しく、有意義に日本語を学ばせたいと私なりに心をこめ、力を尽くして教えたつもりである。3時間もの長い間に飽きてしまわないような工夫や、できるだけ授業で学んだことを残りの一週間に復習できるような宿題作りにも心を配った。5人の生徒たちは、引っ張れば引っ張るだけついてきてくれる教え甲斐のある生徒たちだった。良い生徒たちに恵まれ、楽しい一年を共に過ごせたことを心から感謝している。

日本語学校は、私にとって息子のためだけの場所ではなかった。今まで日本人社会のない場所に住んできたこともあり、小さいながらも日本人共同体があることは大きな支えであった。多くの人々と交流し友人を作ることでもできたし情報交換の場でもあった。みんなで助け合っイベントを企画・達成させたときの喜び、日本語を話す子供たち同士と一緒に遊ぶ姿を見ることも楽しかった。何よりも週に一回、私自身が日本語で会話できることは、ふるさとに戻ったようで嬉しかった。

そんな多面的な役割を担う日本語学校が、これからも益々発展・成長していくことを、陰ながら応援している。

みなさま、どうもありがとうございました。

あなたはどのくらい Edmontonian?

大沢 雅子

バーガー屋の違いが言える。

高速道路の合流で止まってしまうことがある。

Edmonton のことを city of champion と言う

- 10度はちょっと寒い

+ 20度は暑い

冬は- 30度が常識。

冬のコートと言えば Coast Mountain Sports のジャケットだ

スキーはダウンヒルよりもクロスカンントリーだ。

ナイアガラの滝を見たときやっぱり山がベストだと思った。

外国に行くときはカナダマークを忘れない

Edmonton 空港につくとほっとする。

大の大人でも本当に困ったときは怒るより泣くほうが賢明だ。

雪かきは女でもできる。

子供の学校の送り迎えは父親もしている。

クッキーといえばチョコチップクッキー。

ガーデニングが楽しくて仕方ない。

ハローウィンが醜いほど良い。

祭りと言えば Fringe だ。

Root beer が好き。

オーロラは時々家で見かける。

Acreage に住みたい。

WHYTE Avenue はトレンドィーだ。

週に1度は Tim Horton's でドーナツとコーヒーだ。

人が集まれば Turkey だ。

海辺のリゾートより山でキャンプ!

- 30度でもバーベキューするぞ!

1～5点、ビギナー。 6～15点、そこそこ。 16～20点、中級。

20点以上、重症。

8年半の Edmonton での生活が終わろうとしています。後ろ髪引かれます。

楽しかったな。寂しさは出てこないように引き出しにしまっておきましょう。
みなさま、大変お世話になりました。



学芸会の様子



日本語勉強についての不安と希望

王 蔣紅

今年の新学期に娘の芸蓉と息子のポプラがそれぞれ中学と小学に進学しました。ピカピカの一年生になったポプラをみると、日本語学校に入った当時の芸蓉のことを思い出しました。七年前芸蓉は年中組に留年しそうになったことがありました。そのとき、校長の大木先生と担任の井上先生に相談にのっていただき、とりあえず進学してみることにしました。一年後芸蓉は無事に小学校に進み、それから毎年上の学級に進学することができました。これは担任の先生方のおかげだと思っています。親としてはあきらめずに子供の日本語の勉強を支える心の構えも大切だと思います。

日本を離れて八年間が過ぎ、我が家で日本語で話す機会がだんだん減ってきました。知らないうちに子供達と英語で会話をするようになりました。特にポプラは日本語で質問されても英語で答えるようになりました。それで、金曜日は我が家の日本語の日だと決めましたが、いつまでこのルールが守られるかが不安です。

これまで何回か子供達に日本語の勉強をやめるかどうか聞いたことがあります。二人ともあっさりノーと言ってくれました。それに、先生方や後援会の皆様もキャンプなどを通して授業以外で日本語に接するチャンスを増やそうと頑張っています。これは私にとっては希望となり、励みともなります。

最後にこの紙面を借りて、ボランティア精神で献身的に日本語学校の運営に携わってきた先生方と後援会の方々に感謝と尊敬の意を表したいと思います。

親として、先生として

浅野 志保

今年から、年中組を教えることになった。息子には“全然先生みたいに見えない”といわれ、自分でも確かにそうだなあと思い、いつもより少々きちんとした洋服を着てみると、“すこし先生みたいにみえる。”というお褒めの言葉をいただいた。どうやら5歳児でも先生は“ちゃんとしている”というイメージがあるようだ。気を引き締めよう。これからは日本語学校との関わりが親としてだけでなく、先生という立場にもなり、すこし複雑な気分である。ただ両方の立場で、日本語学校を理解する事ができるよい機会と思っている。親として他の先生方の苦労や努力も理解できる一方、クラスの子供たちの保護者の気持ちも理解できる。この一年は自分にとって、とてもいい経験になるだろうと思う。6年前に子供を産んでからというもの、毎日が新しい経験で、教えられる事は山ほどあった。もう40代に足を踏み入れそうな年であるが、それでも人生は、まだまだ毎日が勉強なのだ。子供の学校や、お稽古事の前では、先生方の指導法に、“さすが！”と感心することもあれば、スーパーのレジに並んでいる時に、他の親子の会話を耳にしながら、“なるほど。”と思うことも多い。子育ては毎日が試行錯誤。勉強は勉強でも数学のように答えはすぐそこにはなく、答えをだしても、それが自分の子供の為に一番良い事なのかどうかは、今はよくわからない。答えはきっと、何十年先にあるのかもしれない。

“子供は大人を本当の大人にしてくれる”とどこかで聞いた事があるが、あまりに悩みが多すぎて、すぐにおばあさんになりそうだ。私がまだ独身の頃、2児の母である7つ年上の姉が、“子供を産むのは心配の種を産むようなものだ。”と言っていたのを思い出す。まったくその通りだと思える事がたびたびある。しかしその一方で子供達の笑顔と可能性が私に与えてくれるものは、親ではないとわからない、はかりしれない喜びである。この笑顔と、成長の姿を見たいが為に、毎日必死に子育てをする。それはどの親も同じことであろう。先日の入園式の日、子供達の笑顔とその子供達を見守る保護者の方々の笑顔を見た時に、それを実感し、先生としての喜びと期待と重みをいっぺんに味わった気がした。

息子の日本語

山本 千恵子

息子のニコラスが日本語学校へ通うようになって、早3年が経ちました。ニコラスが物心つく前から、現地のデイケアに入所させた為、彼の最初の言葉はもちろん、英語になってしまいました。私と過ごす時間もすくなく、彼は日本語が、全くと言っていいほど出来ませんでした。だから私も、彼に日本語を話してもらおうなんて全く期待もしていませんでした。日本語学校の存在も知っていたのですが、興味がありませんでした。約4年程前に、ニコラスと一緒に日本へ帰国する機会がありました。その時、ニコラスは、私の友人より、1冊の本(あいうえおの本)をプレゼントとして頂きました。カナダに戻って来てからしばらくすると、ニコラスは、その本に興味を持ち始めました。私に、何回も何回もこれは何？と聞いてくるようになりました。そんな時、ふっと日本語学校の存在を思い出しました。こんなに日本語に興味があるのなら、学校でたくさんのお友達と一緒に勉強をしたら楽しいのでは？と思い、日本語学校の幼稚科に入学をさせました。

初めての日、親の私は凄く動揺してしまいました。同じクラスのお友達はみんな、日本語をぺらぺらと話していたからです。私が話している日本語も70%ほどしか理解できないニコラスが、はたしてこのクラスについて行けるのだろうか？と心配になりました。彼のことが心配だったので、授業中は、教室の横でいつもこっそりと見ていました。授業には、幸いどうにかついて行っていましたが、家での宿題をするのが、とても大変でした。土曜日の朝がとても憂鬱な日でした。隣で泣き叫んでいるニコラスを見て何度、もう学校を辞めてもいいよ、と言った事でしょうか。あんなに泣き叫んでいるにもかかわらず、辞めるとは、絶対に言いませんでした。親としてはとても不思議な気分でした。でも、ある時から、自分から宿題をする様になりました。もちろんたくさん解からない所はありますが、自分で出来る所は、私が言わなくても自ら進んでやっていく様になりました。前に比べると、憂鬱さは少しましですが、やっぱり今でも、宿題をやる時は、憂鬱です。

どうかこうにかで、去年の春ニコラスは、1年生になりました。1年生になると漢字を習い始めるため、また大変な日々が始まるのかと、心配していたのですが、ニコラスは新しい物が好きなので、楽しんで漢字を覚えています。色々な漢字を自分なりに、絵日記で書いたりと努力していました。絵日記の方も、1枚書くのに相当な時間が必要だったのですが、書き方のパターンが解かったのか、少しずつ、書く枚数も増え、時間も短縮出来る様になりました。日本語も時々ですが、私に話してくれるようになりました。でも意味不明なことも多々ありますが。

こんな風に少しずつですが、ニコラスの日本語が上達していくのを見てると、とても嬉しくてたまりません。2年生になってもこの調子でがんばってほしいです。

そしてなんとこの夏休みに、ニコラスは1人で2ヶ月間日本へ行きます。私と私の両親は、日本語があまり話せないニコラスをととても心配しているのですが、とうの本人は、自分は日本語が話せるから大丈夫とはりきっています。3年前までは、全く日本語を話せなかったニコラスが、ここまで自信が持てるようになったんだと実感しています。案ずるより生むが易しという言葉があるように、本人が行く気満々になっているので、それをつぶすわけにもいきません。心配もありますが行かせることにしました。そして2ヵ月後に会うニコラスとの出会いを楽しみに見送ろうと思っています。

2006 年度終了式



出会い

猿子花枝

出会い、というのは不思議なものです。ほんの少しのタイミングの違いで、その人に出会えたり、出会えなかったり。56億人以上の人々が住むこの地球上で、誰かと出会えた、ということは何かとてもかけがえのないことのように思えるのです。

人生において、56億人すべての人に出会えるわけではありません。私が100年以上生きたとしても、私が出会える人の数は人口の一万分の一にも満たないでしょう。そう考えると、言葉を交わすことも目を合わすことすらないすれ違うだけの出会い、そんな『すれ違う』という日常の出来事までもが奇跡のように思えてくるのです。

限られた時間の中での限られた出会い。その出会いの一つ一つが、大なり小なり、私に何らかの影響を与えています。家族、友人、恩師、同僚、今までの出会いがなかったら今の私はないでしょう。誰かに会うことによって、学び、考え、感化され、今の私があるのです。

今回、短い期間ではありましたが、日本語学校で新たな出会いを得ることができました。この出会いから、私は今まで知らなかったたくさんのことを学ぶことができました。貴重な経験ができたことを心から嬉しく思います。保護者の皆様、先生方、生徒の皆さん、全ての人に出会えたことを感謝しています。ありがとうございました。



授業風景



エドモントンでの生活

高橋 健

夕暮れのアルバータ大学の研究室の窓から外を見ると、島国ではなく大陸にいるのを感じます。地平線の彼方まで広がる緑のある平坦な大地、まばらな建物、太陽の光はほぼ水平に差し込んでいるのに地平線へ沈む直前まで強烈な力で全てのものに強い陰影をつけているのを見ると、カナダにいることを実感します。これが東京の夕方だと、地平線の彼方まで埋め尽くす大小のビル、窓からは電車や車の喧騒、湿気を含んだ重い空気、大気の汚れとネオンサインにより弱まったぼんやりした日光を見ることになり、同じ夕暮れの風景でも全く別世界です。

日本語補習校の殆どの皆様はカナダに永住か、かなりの長期滞在予定で住んでいることと思います。自分は東京の大学病院から留学のためにカナダへ家族とともに来ました。当初トロントに一年間だけの滞在の予定でしたが、ひょんなことからエドモントンに移動し、更に2年間の滞在をすることになりました。トロント在住時にエドモントンの移動の話が出るまで、恥ずかしながらエドモントンについて何も知りませんでした。自分の持っていたエドモントンのイメージとしては、アメリカ西部劇映画に出てくる町並みと大地、石油により成り立っている都市、冬はマイナス40度になるアジア人の少ない都市、特に日本人はほとんど存在しない地域と、大変貧困なものでした。

現在エドモントンに移動してから1年半。感じたこと、驚いたこと、考えたことは10回連載しても書ききれない程多々ありますが、これは一回読み切りの文章なので、やはり日本語と日本人学校について書きたいと思います。

エドモントンの日本人の数はトロントに比べ随分少ないのですが、確固とした日本語学校が存在しており、これがまず驚きでした。ちなみにトロントは日本人を含めたアジア人は非常に多く、特に自分の住んでいた北のエリアはアジア人が八割を占めていました。日本語補習校も東京中心部の小学校よりよほど規模は大きかった。

東京での自分の仕事は非常に忙しく、当時小学校一年生だった子供と接する時間は殆どなく、自分が直接小学校に接したこともありませんでした。しかしここでは自分も仕事以外の家族と過ごす時間を多少は作ることが出来ます。カナダに移動して二年半過ぎましたが、娘の英語は家族で一番上達が早いのですが、家以外の日常生活の殆ど全ては英語で行っているため、日本語の進歩は停滞しております。この様な状態になったときに、たとえ週一回3時間だけでも学校で日本語を習うのは本当に効果があると思います。勿論家で親が手伝いながら国語の自習する時間も大切です。しかし、学校の教室で佇まいをただして椅子に座り授業を受けるのみならず、日本語を話す友達を作る、休み時間に日本語を子供同士で話す、日本と同じ行事、学芸会、運動会、弁論大会を行うなど子供にとって掛け替えのない大切なことと思ひ、大変感謝してお

ります。娘のみならず私たち両親も大変貴重な体験をさせていただいております。

この一年間で学校活動の内容を垣間見る機会が随分ありました。自分は日本では小児科医をしており、仕事で日常から子供に接しておりました。が、病院の中で接するのはあくまでも子供にとっては非常時の状態です。

病気の子供を診るときは、勿論西洋医学の理論にのっとりた診断と治療をしますが、それだけでは十分ではありません。治療の目標である元気な子供の状態を知らなければいけない。入院中の子供は、例え状態が回復してもベッドの上に行動範囲を制限され、外来中の子供は大抵具合が悪い状態です。毎日その様な病気の子供達に接していると、段々子供としての正常な状態を忘れてくる。時々若い研修医に、外に行って元気な子供を見てきなさい、と指導をする程です。元気な子供のエネルギーの質と量の特徴を知らないといけません。

自分にとって健康な状態の子供の集団生活に接するのは殆ど初めてです。学校授業風景や学校行事の写真撮影を依頼され、元気な子供を肌で感じる機会が沢山ありました。幼稚園児から、日本語学校創立30周年祝賀会で90歳の老人まで、随分多くの写真を撮影しました。写真は大変面白いもので、ある一瞬のみ切り取ります。しかし一瞬に集中するゆえに、現場にいても見過ごしがちな、動画では散漫になりがちな子供の特性を映し出すことがあります。また被写体の子供を捕らえようとする時にもその特性の違いを大いに感じます。幼稚園児はそのまま動き回るエネルギーの塊。小学校1, 2年生は自由で何の拘束も無くエネルギーがむき出して爆発の様に迫ってくる。小学校3, 4年生になるとエネルギーが方向性を持ち始める。高学年以降の子供のエネルギーを持ちつつ大人の抑制された身体を伴う独特の不安定感など、子供の個人差は大いにあれ、病院勤務生活では忘れがちな子供の特性を感じます。日本では想像もしなかった自分にとっては新たな方法で大勢の子供たちに接し、また子供たちの認識を新たにしたのでした。もっとも被写体が大人になるとさらに個性が枝葉の様に広がり、大人の撮影もまた大変興味深いものですが。

また弁論大会の審査員として参加させていただいた時は、先生方の仕事の難しさを身をもって知らされました。学校運営の会議や行事の舞台裏に参加することによって、学校の運営というものがいかに多くの方々の多大な努力で成り立ち、かつ困難を伴うことかも知ることが出来ました。

仕事一辺倒にならざるを得なかった多忙な東京での生活をしてきた自分としては、日本語学校で得たことは言葉で言い尽くせない位多くあります。

学校への感謝、学校にて感じたことについて随分雑多な文章になってしまいましたが、もうかなりスペースを使ってしまった様なので、これにて筆を置きます。今年の秋には我々は帰国する予定ですが、日本語学校のより一層の発展を祈っております。ありがとうございました。

Nurturing a Multicultural Identity

Sarah Apedaile

If “it is of critical importance in multicultural education [in a multicultural society] to focus on identity development – gender and ethnic at the individual level, and social and political at the community and national level”¹ (Ghosh2002), then it is important for my family of two to join the MEJCS community. My daughter’s father is Japanese and I am European-Canadian, with my ethnic identity grounded in British-Canadian culture. Because my daughter has parents of two different ethno-cultural backgrounds I feel it is my duty to provide her a culturally relevant foundation in both (even if her father is not present in her everyday life) so that as she grows older she can feel at home in herself.

We have been a part of the MEJCS community for nearly two years now and although Ema’s Japanese language development may trail behind that of her classmates, it is through her participation in the classes, the process and the community that she is nurturing and understanding her complex cultural identity. Culture is embedded in language and even though class is only once a week the groundwork is being laid at an age that is flexible, open and full of potential. I think that the relationships she is developing are teaching her valuable skills. For example as she delights in new learning or feels frustrated when she doesn’t understand she is building patience and character. Most importantly, however, she is developing a sense of belonging in another community and knowing that different is comfortable not threatening.

For Ema, looking at books and listening to stories written in hiragana is normal. Watching a video in Japanese and singing along with the Japanese songs in the car is fun. Writing her name and doing her homework on her own leaves her feeling empowered and proud. We may never live in Japan so what is the point, you may ask? I believe that in today’s increasingly complex world that we need more and more cultural bridges, like our bi-cultural, multilingual, multicultural children to help broker understanding between people of different cultures as they grow up. A multicultural identity is in my view a gift that requires nurturing and celebrating.

The value of this program is priceless in today’s world and as a parent I feel proud when I see my daughter bow to her Sensei. When Ema can move seamlessly and positively between these two identities carrying the richness of each to the other I will be smiling and feel that I have behaved responsibly as a parent in a multicultural society.

¹ Ghosh R. (2002) Redefining Multicultural Education 2nd Ed. Nelson Thompson Learning



★ 発行 ★

エドモントン地区日本人コミュニティスクール後援会

会長 清水 聡

2007年6月発行

★ 連絡先 ★

Satoshi Shimizu

10636-148 St

Edmonton, Alberta

Canada T5N 3H1

